

マルタとマリア

年間第16主日C年

ルカ福音記者が、ベタニアの姉妹マルタとマリアのエピソードをとおして何を教えようとしているかを理解するためには、それが福音書の構造の中でどういう場を占めているかを明らかにする必要があります。ルカは第4章で、イエスがナザレでご自分の生涯の使命を語られた説教を伝えています。つまり、主は、貧しい人々に福音を伝え、囚人に解放を与え、目の不自由人々に光を与えるために来られたのです。その説教は、ヨハネ福音書で、主はご自分の民のところへ来られたのに、民は受け入れなかったという箇所にあたります。ナザレで人々は、イエスを町が建っている崖まで連れていき、突き落とそうとしたが、「イエスは、人々の間を通り抜けて立ち去られました」（ルカ4・30）。

ルカは他の福音記者と同様に、イエスを拒絶する人々の他に彼を受け入れる人もいたことを記しています。また、イエスを受け入れる人々の中でも、ある人はすぐに主と認め、他の人は徐々にしかイエスを主と認められないことを伝えています。ヨハネは、トマという使徒のエピソードをとおして、同じことを伝えています。トマは、使徒の中でもいちばん最後に復活された主を認めたからです。ルカは、いわゆる対比する「カップル」で、それをより細かく表しています。ザカリアとマリア、イエスを食卓に招待するファリサイ人と罪の女、ベタニアのマルタとマリアという具合です。ザカリアは、大天使ガブリエルのお告げを疑いましたが、マリアはすぐそれを受け入れて、メシアの母となります。マルタとイエスを食事に招待したファリサイ人にとって、イエスは預言者であり、賓客とされていますがそれ以上ではありません。それに対して、ベタニアのマリアにとってイエスは、イスラエルが待ち望んでいた唯一の主です。今日の福音は、特に二人の姉妹マルタとマリアについて考察するように招いてくれます。

この二人のエピソードは、私たちのうちに問いを引き起こします。なぜイエスは、ご自分の話に集中して耳を傾けるマリアを全面的に高く評価しながら、多くのことに思い悩み、心を乱しているマルタを微笑ましくも、戒められたのでしょうか。「必要なことはただ一つ」と主は言われますが、ヨハネ福音書にある姉妹のほかのエピソードは、それに光を与えてくれるでしょう。兄弟ラザロを蘇らせていただいた後、過ぎ越し祭の六日前、イエスのために夕食が用意されたとき、マリアは非常に高価なナルドの香油をイエスの足に塗り、自分の髪でその足をぬぐいました。それは、「ただ一つの必要なこと」と関係しているようです。香油の値段は300デナリオンで、一家族の生活を一年間支えるのに相当するものでした。弟子たちはこれを見て憤慨し、その「無駄使い」に見える行動を厳しく批判します。しかし、イエスは、かつてのベタニアの訪問のときのように、このマリアの行動を全面的に称賛します。しかも、マタイとマルコの福音書は、この評価の理由となる、主の言葉を伝えます。「世界のどこでも、福音が述べ伝えられるところでは、この人のしたことも記念として語り伝えられるだろう」と（マタ26・10-13；マコ14・6-9）。主は、マリアが自分の行いで示したように、福音の中心を捉えていたことを認めています。彼女にとってイエスは、この世の物の価値を完全に超える卓越した方です。言い換えると、もし教会が、小さく見なされる貧しい人や見捨てられている人々への愛、不正からの解放、平和と和解の建設、敵へのゆるしと愛、貞潔などを宣言していながら、主イエスの卓越した意味を忘

れるなら、そのとき教会は、福音を説くのをやめていたということです。ベタニアのマリアのように、イエスの弟子となって初めて、復活された主の命は、新約聖書が説いている善い行いを実践する私たちの生活に映し出されるでしょう。

マルタは多くのことに思い悩んでいます。マリアは、ただ一つの必要なことに集中しています。その区別は、旧約と新約の区別に相通じています。マリアは、シナイ山で結ばれた契約を超え、最後の決定的な契約に入っています。ルカ、マルコ、マタイの福音書に記されている金持ちの若者のエピソードは、その点に関して光を投げかけます。若者は、永遠の生命に入るために、何が重要かと主に問いかけます。主は最初の契約である十戒に言及されます。「姦淫するな、殺すな、盗むな、父母を敬え・・・」。そこで、若者は、子供のときからそれらを守ってきましたと答えると、主は根本的な点を指摘します。つまり若者は、旧約の掟を守ってきましたが、主は、新約の使者なのです。新約では、すべての掟は一つに集約されます。それは、すべてを捨てて、主に従うことです。このことは、新約聖書の中にいろいろの形で繰り返されます。たとえば、ヨハネ福音書の6章では、パンが増やす奇跡の後、ユダヤ人は、神の業を行うためには、何をしたらよいでしょうか、とイエスに尋ねます。そこで、主は答えられます。神の業はただ一つ。「神がお遣わしになった者を信じること、それは神の業である」と（ヨハ6・28-29）。当然その信仰とは、主に従うことです。

キリスト教の回心、究極的な契約への回心とは、多数のものから一つのものに、多くの掟から唯一の掟に、多くの業から、神の唯一の業に、旧約の律法と預言者と知恵から、人間となられた神の唯一のみ言葉に回心することです。その回心は、マルタのうちにも行われました。イエスが、「私は復活であり、命である」と言われたとき、主の恵みに助けられて、最後の契約に入ります。「主よ、あなたが世に来られるはずの神の子、メシアであると私は信じております」と彼女は答えるのです。私たちは、マリアから、多くのものから、一つのものに集中する回心の単純さと深さについて教えられます。マルタからは、回心が徐々に行われることを教えられるでしょう。真の回心であっても、それは、死ぬまで広げられ、深められていくはずで

ここでは特にマルタとマリアについて思いめぐらしました。確かに、今日の典礼の第一朗読と福音書の共通のテーマは歓待です。私たちはそれを無視したわけではありません。なぜなら、最初の契約からイエスによる最後の契約への内なる展開と私たちの回心は、おもに聖霊の働きによるものだからです。「甘美な心の賓客である」聖霊は、私たちの心をご自分の芸術作品に作り上げたいのです。私たちの協力が、そのお望みに叶うものとなりますように。

J. E. Perez Valera S. J.